

〔魅力ある特産熱帯果樹の周年生産モデル確立に向けた栽培技術開発〕

カンキツ類の小笠原における生育特性の把握
～「小笠原オレンジ」有望系統の繁殖方法の検討～

田邊範子・荒井那由他*

(小笠原農セ) *現農総研

【要 約】小笠原オレンジ I 系統の育苗は接ぎ木が適し、取り木は適さない。接ぎ木に用いる台木としては、「ブンタン」、「ダイダイ」ともに利用可能である。

【目 的】

小笠原諸島特有のカンキツ品種「小笠原オレンジ」は島内消費が見込め、冬期の観光資源としても期待できる農産物として再評価されており、農業センターで収集した4系統から硫黄島由来 I 系統を優良系統として選抜した。I 系統の普及に向けては、基礎的な栽培技術の検討が必要であるため、本報では I 系統の繁殖方法について検討する。

【方 法】

1. 接ぎ木繁殖：2019年2月14日に、主枝径10mm以上の実生2年生「ブンタン」および「ダイダイ」台木各10本を供試し、2月12日に採穂し密封冷蔵保管した「小笠原オレンジ」I 系統の二芽穂木を切り接ぎした。

接ぎ木以降、芽の大きさ3mm以上を発芽として、発芽率を調査し、3月18日から新芽の伸長量を計測した。

2. 取り木繁殖：2019年4月23日に、12年生「小笠原オレンジ」I 系統2樹を供試し、各樹10枝に取り木処理を行った。1ヶ月毎に発根を処理部分の外観から調査した。10月8日には外観から発根が確認できないものも処理部分を開いて確認し、わずかな発根があるものも含めて鉢上げした。11月10日に成苗率を調査した。

【成果の概要】

1. 各台木における活着率を表1に示した。台木の種類によらず活着は良好で、1か月後には伸長開始した。調査終了までの活着率はダイダイ台木で90%、ブンタン台木で80%と高く、いずれの台木も利用可能と考えられる。また、発芽後の新梢伸長量(2芽合計)を図1に示した。新梢伸長量に台木による差は無かった。

2. 取り木育苗では、処理2か月後まで外観からは発根がほとんど確認できなかった。9月の調査で外観から発根が確認できるものは30%と少なかった。10月には少量でも発根していたものを含め発根率は65%であったが、発根が十分でなかったものは枯死した。鉢上げ1ヶ月後の成苗率は35%と低く、取り木による繁殖は適さないと考えられる(図2)。

【残された課題・成果の活用・留意点】

1. 各台木における圃場定植後の生育状況について確認していく。また、より多くの種で台木適性の検討が必要。

2. 取り木を2月に処理した予備試験でも、6ヶ月以内の発根は1割程度しか見られなかった。

表1 「小笠原オレンジ」I系統の接木繁殖における活着率

台木	2月14日 (処理日)	3月7日 (21日後)	3月15日 (29日後)	3月18日 (32日後)	3月29日 (43日後)	4月8日 (53日後)
ダイダイ	0	10	40	60	90	90
ブンタン	0	10	70	70	80	80

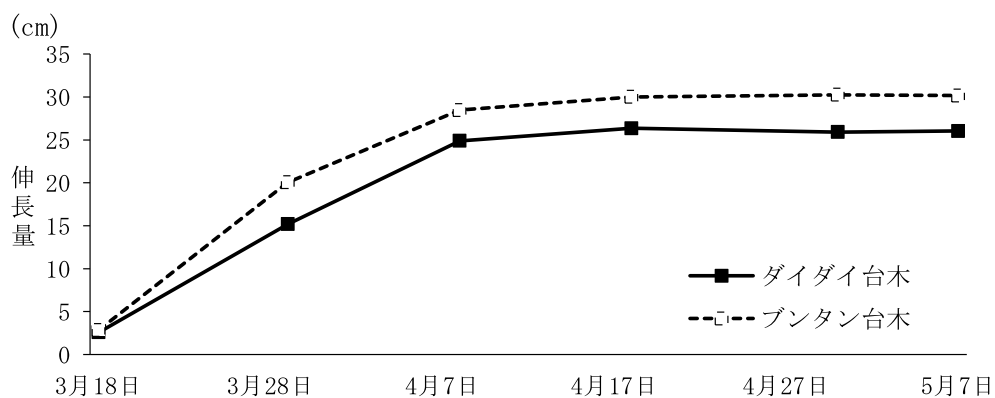


図1 「小笠原オレンジ」I系統の接木繁殖における新梢伸長量
同一調査日の各台木間にはt検定により5%水準で有意差なし

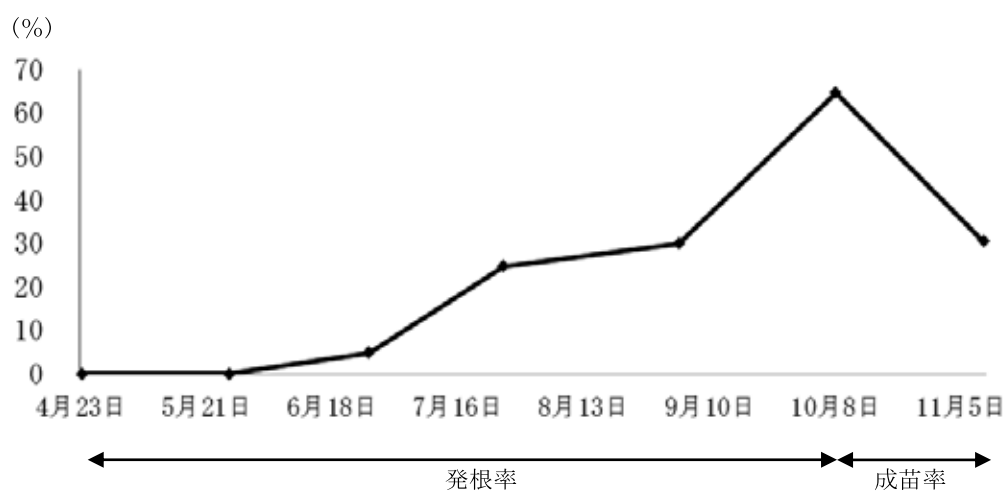


図2 「小笠原オレンジ」I系統の取り木繁殖における成苗率